

助走

吉貝甚蔵

切れ切れの風景を積みあげるキミへ
断片を紡ぐ長い長い物語へと溺れていくキミへ
ボクは貝の化石を孕んだ変成石灰岩を贈る
朝 地平を撫でる雨が降り始める前に
浮き石を踏み岸へ渡ろう
葦の原を縫う遊歩道で
ことばをそつととりかわそう
流れる小石に名前は紛れ
駆け抜けるを消していく
ボクらがいつもいた場所だから
広場のスケッチも描いておこう
集まるために移動した
そこにいたのはボクらだった
はずだった
のは
今キミが物語に帆船を浮かべたからだ
そこからキミは
あの日の星の炸裂を消滅を
見つめる
戸惑うのは
肥大する恒星が惑星を飲み込むからだ
苛立つのは
時間が距離を裏切るからだ
躊躇うのは
ここにいないキミがここにいないボクと
そこにいるからだ
そこ 広場は 立体ではなく
奥行きのある 高さのある 平面であり続け
草原であり砂漠でもあつてただ茫洋と狭く
雨音それとも虫の音
細胞が入れ替わる音は聞こえるわけもなく
電子の流れが音をたてることはないのだが
不在のボクらが平面を移動していく
うつろうと呼べば漂うと応え
たちまちと言えばつかのまと返す

物語が流れていく
ボクらは繰り返す
駆け抜けないための助走を